

フランス語の従属節中の文体的倒置と情報構造

谷 口 永里子

京都大学大学院 共生人間学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 本研究の目的は, フランス語の書き言葉で頻繁に用いられる文体的倒置が従属節中に出現する場合において, 様々な従属節における倒置の頻度を明らかにし, 前提を表す従属節における倒置の要因が「情報の重要度」によって説明できることを示すことである。従属節には断定を示すものと前提を示すものがある。Lahousse (2011) は理由や譲歩を表す副詞節と非制限的關係節を断定を表す従属節とし, その節内の倒置は主語の非トピック化によって起こると示した。この制約によって, 断定を表す従属節中の倒置の頻度は前提を表す従属節よりも低いと指摘したが, 詳細なデータは提示されず, 前提を表す従属節については倒置の要因の十分な説明がなされなかった。そこで本研究ではコーパス Frantext を用いて, 様々な従属節の接続詞ごとに倒置の頻度を明らかにした。その結果, 断定を表す従属節のうち, 理由を表す従属節と譲歩を表す従属節における倒置の頻度が最も低く, 非制限的關係節については, 制限的關係節と比較すると倒置の生起頻度がより低いことを明らかにした。また, 前提を表す従属節中の倒置は「情報の重要度」という概念を用いることで説明が可能となり, 主語が担う情報の重要度が動詞の担う情報の重要度よりも相対的に高い場合に倒置が起こりやすいことを示した。前提を表す従属節でも情報の重要度に沿った語順が選択されう

ることを明らかにした。

1. は じ め に

本稿は (1) のようなフランス語の書き言葉で用いられる文体的倒置が従属節中で用いられる場合を考察対象とし, コーパス Frantext を用いた量的・質的分析を行う。

(1) Tu vas me faire gober que tu n'es même pas sûr du métier que faisait ton grand-père ?

(JLB1980 : 102) ¹⁾

Are you going to make me swallow that you're not even sure of the job which was doing your grandfather. ²⁾

フランス語の文体的倒置とは, 疑問文や挿入節ではないところで, 通常は SV の語順である主語名詞句と動詞句の語順が倒置される現象である。文

体的倒置は主節にも従属節にも用いられるが, 本稿では従属節中の文体的倒置を分析対象とする。文体的倒置は (1) の関係節以外の従属節でも使用される。(2)~(6) にそれぞれ, 補文 (間接疑問), 時間・比較・目的・理由を表す副詞節において, 主語と動詞の倒置が起きている例を挙げる。

(2) Très intrigué et sérieux tout à coup, il me demanda où était cet ami. (MT1989 : 143)

Very intrigued and serious all of a sudden, he asked me where was this friend.

(3) Les derniers oiseaux se sont tus depuis longtemps lorsque retentit dans les bois le hululement d'une chouette. (CS1981 : 38)

The last birds have been silent for a long time when resounded in the woods the hooting of an owl.

(4) [...] cette initiation graduelle était érotique-

ment plus captivante que ne l'aurait été une licence d'un seul coup totale. (GM1981 : 54)

[...] this gradual initiation was erotically more captivating than would have been a one-shot license.

(5) Et il lui fallait un après-midi de funérailles, un Manivelle retrouvé sur la tombe de Vincent pour que s'opère la fusion, le transfert. (VT1985 : 128)

And he needed an afternoon of funeral, a crank found on the grave of Vincent in order that takes place the merger, the transfer.

(6) C'est le métaphysicien bégayeur au visage concassé qui, [...], passera quelques mois à Rome où tu l'as déjà rencontré parce que ne comptent pour toi ni le temps ni l'histoire : c'est Ballanche.

(JDO1993 : 170)

It is the stuttered metaphysician with a crushed face who, [...], will spend a few months in Rome where you have already met him because do not count for you nor time nor history : it's Ballanche.

従属節中の文体的倒置に関する先行研究は多くあるが、そのうちの Lahousse (2011) は、主節の一部として従属節が前提を表すか断定を表すかによって、その従属節中の倒置にかかる制約が異なることを指摘している。例えば (6) のような理由節や、譲歩節、非制限的關係節、節中の動詞が直説法である補文は、主節における断定を表す要素であり、聞き手に新情報として提示される。一方、(1)～(5) のような制限的關係節、節中の動詞が接続法である補文、時間・比較・目的を表す副詞節は、前提を表す部分であり、話し手は既知情報として扱う。Lahousse は (6) のような断定を表す従属節において倒置された主語は非トピック化され、主語がトピックとして解釈されないような特徴がなければ倒置が容認されないのに対し、(1)～(5) のような前提を表す従属節にはそのような制約がないと主張している。そしてこの制約のため、断定を表す従属節における倒置の例が少ないと指摘している。しかし、各従属節における倒置 (VS) と正置 (SV) の具体的な例数や割合については示されておらず³⁾、Wall (1980) や Fuchs (1997) においても提示されているデータが主に関係節に限られている。そのた

め、SV と VS の割合を従属節ごとに比較することができず、断定を表す従属節中の倒置がどの従属節の中の倒置と比較して「少ない」といえるのか明らかではない。

また先行研究では情報構造の観点から、主節における倒置の機能は「主語の焦点化」であると分析されている (東郷・大木, 1986)。しかし従属節中の情報構造に関しては従来、断定を表す従属節中には情報構造 (トピック・コメント構造) が存在するが、前提を表す従属節では情報構造が存在しないと言われてきた (Mathesius 1975, Lambrecht 1994, Erteschik-Shir 1997, Komagata 2003)。Lahousse (2011) も同様な立場をとり、前提を表す従属節の内部においては情報構造が関与しないため、その節内の主語がトピックとして解釈されないような特徴を持たなくても、倒置は容認可能と指摘している。しかし、前提を表す従属節において倒置が使用される積極的な理由については十分に分析されていない。本稿では、前提を表す従属節中の倒置が、従属節内の主語と動詞が担う情報の重要度の差によって引き起こされることを指摘し、情報の重要度という意味では情報構造が前提を表す従属節の中にも存在することを示す⁴⁾。

本稿の目的は次の2つである。まず各従属節における倒置の頻度の差を明らかにすること。そして前提を表す従属節においても、情報の重要度という意味での情報構造に従って倒置が起きていることを示すことである。まず第2章で Lahousse の主張についてまとめ、改めて問題点を指摘したうえで、第3章でコーパスによる調査結果のデータを提示し、前提と断定を表す従属節中の倒置の割合について検討する。第4章では、3章で収集したコーパスのデータをもとに、前提を表す従属節における倒置の要因が、「情報の重要度」という概念で説明できることを示す。

2. 先行研究の検討

Lahousse (2006a, 2006b, 2011) は、従属節中の倒置された主語は主なトピックとして解釈されることがない、と分析している。例えば (7) は譲

歩節中の倒置の例であるが、主語以外にトピック要素が存在し、かつ主語が焦点解釈される特徴を持っているため、倒置主語はトピックとして解釈されない。

(7) Malheureusement, cette supposition n'était pas vérifiée : sur les cartes d'alors, et bien qu'y fût dessiné un quadrillage qui rappelait celui des méridiens et des parallèles, la route suivie par le navire devenait, non une droite, mais une ligne brisée.

(Rousseau, cité dans Lahousse 2011)

Unfortunately, this assumption was not verified : on the maps of the time, and although was drawn a grid that recalled that of the meridians and parallels, the route followed by the ship became, not a line, but a broken line

先行文脈内の場所の情報を指示する y が場面トピックとなっているのに加え、主語が不定名詞句であり、この譲歩節中の倒置主語はトピックと解釈されず、焦点として解釈される。主語のトピック解釈を妨げる特徴として次の a~g が挙げられている。a. 動詞の前に時空間を表す要素がある(場面トピックがある)。b. 主語が不定名詞句である。c. 動詞と主語の間に照応要素を含む前置詞句がある。d. tout, même など、範列を暗示する副詞句がある。e. 主語名詞句が制限的關係節を伴う。f. 主語が列挙となっている。g. 対比の対象となっている。この a~g のいずれも満たしていない場合、断定を表す従属節中の倒置は容認困難になると Lahousse は主張する。

(8) a. ??? Je veux partir bien que soient arrivés les enfants.

(Lahousse, 2011)

I want to leave although have arrived the children.

b. ??? Bien que soient venus les enfants, grand-mère n'a pas voulu rester chez nous. Elle est partie ce matin.

(Lahousse, 2011)

Although came the children, Grandma did not want to stay with us. She left this morning

Lahousse は、この制約は前提を表す従属節には当てはまらないとしている。これは、断定を表す従属節内にはトピック・コメント構造が存在するため、主語がトピックとして解釈される可能性

があるが、前提を表す従属節にはトピック・コメント構造が存在せず倒置主語がトピックとして解釈されることはないためである。断定を表す従属節としては、譲歩節、理由節、非制限的關係節、動詞に直説法が用いられている補文が認められている⁵⁾。これらの断定を表す従属節においては、a~g の特徴がないと倒置が認められないという制約がかかるため、断定を表す従属節である理由節と譲歩節における倒置の例数が少ないと述べている。しかし各従属節における SV と VS の明確な割合は提示されておらず、どの程度「少ない」のか、前提を表す従属節すべてと比較して VS の割合が低いと言えるのか明らかではない。Lahousse (2011) 以前の Wall (1980) や Fuchs (1997) において提示されている SV と VS の割合のデータも関係節に限られているため、様々な従属節中の SV と VS の割合については調査の余地がある。

また Lahousse は、制限的關係節や時間・比較・目的を表す副詞節などの前提を表す従属節では、a~g の特徴がなくとも倒置が容認されると指摘している。(9)(10) はそれぞれ目的と比較を表す副詞節であり、a~g は当てはまらないが、倒置が容認されている。

(9) Je ne supportais pas d'avoir oublié mes ailes et de me sentir là— haut comme au bord d'un gouffre où j'allais basculer pour que cesse le cauchemar.

(Bienne, cité dans Lahousse 2011)

I could not stand to have forgotten my wings and to feel up there like at the edge of a chasm where I was going to switch in order that stops the nightmare.

(10) « Si je partais ! » répète Jacques, sur son banc au pied d'un grand palmier. Partir, comme partent les navires

(Romilly, cité dans Lahousse 2006)

"If I had left!" repeat Jacques, on his bench under a large palm tree. To leave, as leave the ships

前提を表す従属節の内部には、トピック・コメント構造が存在しないため、場面トピックの有無や倒置主語の性質に拘わらず、従属節内の倒置主語はトピックとして解釈されない、という条件を満たす。この Lahousse の「従属節中の倒置された主語は主なトピックとして解釈されない」という主張は妥当と考えられるが、前提を表す従属節内の

倒置に関して積極的な倒置の要因の分析は行われていない。前提を表す従属節にトピックコメント構造がなければ、倒置しなくとも主語はトピックとして解釈されないため、倒置を使用する必要はなく、なぜ倒置を用いるのか明らかではない。

以降では、主に関係節と副詞節に着目し、非制限的な関係節、理由節、譲歩節を断定を表す従属節とし、制限的な関係節、時間、比較、目的、*sans que* 節を前提を表す従属節として議論を進める。次章では、コーパスを用いて、各従属節における SV と VS の例の収集結果を提示し、断定を表す従属節と前提を表す従属節における VS の割合の違いを明らかにする。

3. 従属節タイプと倒置の頻度

3.1. 各従属節中の SV と VS の例の収集と結果

従来の従属節中の倒置の研究でも、コーパスを

用いてデータ収集を行ったものはあるが、各従属節で多数の例を扱い、明確な数字を示したものは見当たらない (Wall 1980, Fuchs 1997)。ここではフランス語コーパス Frantext における最新のデータを用い、各従属節における SV と VS の割合を明らかにする。Frantext catégorisé の 1980 年以降のすべてのテキストを対象とし、接続詞ごとに SV と VS の例を検索した⁶⁾。今回対象とした従属節は次のとおりである。制限的な関係節 (*que*, *ce que*, *dont*, *où*, *lequel*⁷⁾), 非制限的な関係節 (*que*/*dont*/*où*)⁸⁾, 補文・間接疑問 (*que*, *où*, *comment*, *combien*, *voici/voilà que*), 時間 (*quand*, *lorsque*, *alors que*, *dès que*, *pendant que*, *avant que*, *tandis que*), 比較 (*plus/moins /aussi/si adj. que*, *comme*, *tel que*, *autant que*), 目的 (*pour que*), *sans que*, 理由 (*parce que*, *puisque*), 譲歩 (*même si*, *bien que*)。接続詞ごとの SV と VS の割合を視覚化したグラフを図 1 に、各従属節のタイプ、接続詞の語彙項

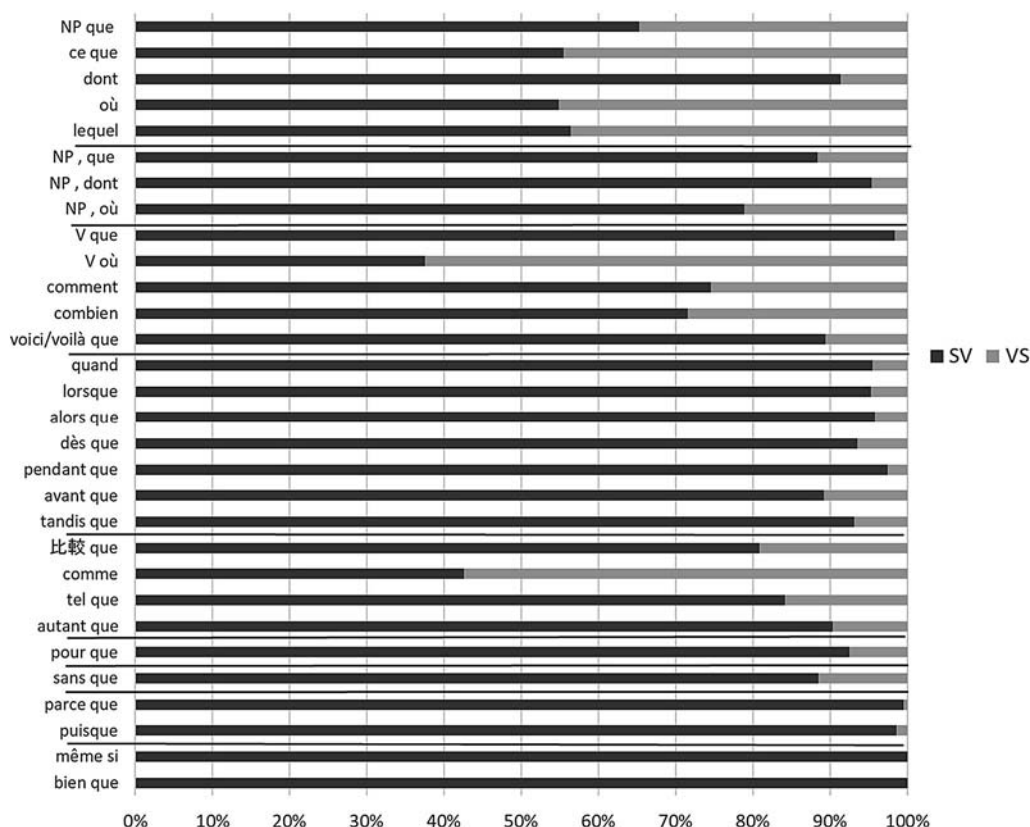


図 1 各従属節の SV と VS の割合

表1 各従属節内のSVとVSの例数とパーセンテージ

		SV	VS	total
制限的関係節	NP que	2810 65 %	1493 35 %	4303
	ce que	745 55 %	598 45 %	1343
	NP dont	1868 91 %	176 9 %	2044
	NP où	1479 55 %	1215 45 %	2694
	lequel	601 56 %	464 44 %	1065
非制限節	NP, que	882 88 %	116 12 %	998
	NP, dont	475 95 %	23 5 %	498
	NP, où	434 79 %	116 21 %	550
補文・間接疑問	V que	2950 98 %	45 2 %	2995
	V où	31 36 %	54 63 %	85
	comment	129 75 %	44 25 %	173
	combien	53 72 %	21 28 %	74
	voici/voilà que	93 89 %	11 11 %	104
時間	quand	2001 95 %	95 5 %	2096
	lorsque	611 95 %	30 5 %	641

		SV	VS	total
時間	alors que	347 96 %	15 4 %	362
	dès que	159 94 %	11 6 %	170
	pendant que	234 98 %	6 3 %	240
	avant que	165 90 %	19 11 %	184
	tandis que	513 93 %	38 7 %	551
比較	比較 que	76 81 %	18 19 %	94
	comme	374 43 %	504 57 %	878
	tel que	32 84 %	6 16 %	38
	autant que	47 90 %	5 10 %	52
目的	pour que	372 93 %	30 7 %	402
sans que	sans que	85 89 %	11 11 %	96
理由	parce que	636 100 %	3 0 %	639
	puisque	210 99 %	3 1 %	213
譲歩	même si	98 100 %	0 0 %	98
	bien que	92 100 %	0 0 %	92

目ごとのSVとVSの例数と割合を表1に示した。以降、この調査結果に基づき、各従属節における倒置の頻度について考察を行う。

3.2. 前提と断定を表す従属節における倒置の頻度の差

調査結果によると、断定を表す従属節のうち、理由を表す従属節と譲歩を表す従属節における倒置の割合は0～1%であり、調査した従属節の中で最も倒置の頻度が低いことが分かる。補文のque節も2%と低いが、42例の倒置の例があるのに対し、理由節の倒置ではparce queが3例、puisqueが3例、譲歩節ではmême si, bien queともに0例と最も少数である。収集した理由節の倒

置の例のうち2例を挙げておく。主語名詞句が列挙になっていたり、制限的關係節を伴っているなど、倒置主語が焦点として解釈されるような特徴を備えていた。

(6) [...] tu l'as déjà rencontré parce que ne comptent pour toi ni le temps ni l'histoire: c'est Ballanche. (JDO1993: 170)

(11) Quand les études ont été organisées, rien n'était imposé puisque n'allaient à l'école que ceux qui voulaient y aller. (FD1985: 428)

When the studies were organized, nothing was imposed since went to school only those who wanted to go there.

また、断定を表す従属節である非制限的關係節

については、前提を表す従属節である制限的關係節と比較して、倒置の割合が低いことが明らかになった。制限的關係節の *que* 節内の倒置は 35% に上るが、非制限的關係節の *que* 節になると 12%, *où* 節では制限的關係節が 45%, 非制限的關係節 21% となっている。關係節の中では倒置の割合が低い *dont* 節についても制限的關係節では 9% に対し、非制限的關係節では 5% と、より低い値となっている。

制限的關係節のうち先行詞が不定名詞句の場合は、關係節は非制限的になるとされている (古川 1983, 河野 2012)。これを踏まえると、先行詞が定名詞句の制限的關係節中の倒置よりも、先行詞が不定名詞句の制限的關係節中の倒置のほうが倒置の割合が低いことが予想される。Frantext catégorisé で、先行詞が定名詞句である制限的關係節、先行詞が不定名詞句である制限的關係節、そして非制限的關係節のうち、關係代名詞が *que* である例について SV と VS の例数と割合を調べたところ表 2 の通りとなった。先行詞が定名詞句の制限的關係節、先行詞が不定名詞句の制限的關係節、そして非制限的關係節の倒置の割合を比較すると、順に低くなっている。つまり、前提を表す關係節のほうが倒置が起こりやすく、断定を表す關係節のほうが倒置は起こりにくい傾向があると考えられる。そして (12) のような先行詞が不定名詞句である制限的關係節でも、(13) のような非制限的關係節でも、倒置主語が不定名詞句であるなど、倒置主語が焦点解釈されるような要因が含まれている。

(12) Nous fîmes encore quelques pas, [...] avant de héler un taxi que conduisait *un Noir*.

(JDO1986 : . 244)

We took a few more steps, [...] before hailing a taxi which drove a *black man*.

(13) Tous les signes de mûrissement, ou de

vieillessement, qu'apporte un simple inter- valle de quelques années, sont perçus, [...]. (JG1980 : 259)
All the signs of ripening, or of aging, which bring a simple interval of a few years, are perceived,

以上のとおり、關係節においても前提と断定の違いが倒置の生起頻度に影響を及ぼすことを示した。先行研究では、漠然と断定を表す従属節では倒置の頻度が低いことが指摘されていたが、ここではコーパス調査の結果から、断定を表す従属節のうち、理由と譲歩を表す副詞節は、他のどの従属節よりも倒置の頻度が低く、非制限的關係節は制限的關係節と比較すると倒置の頻度がより低いといえることが明らかになった。

断定を表す従属節中の倒置の例では倒置主語が焦点解釈されるような特徴があることが収集した例でも確認できた。次章では、Lahousse (2011) では十分に説明されていないかった前提を表す従属節における倒置の例について、他の先行研究で指摘されてきた倒置の特徴を踏まえ、「情報の重要度」という概念で説明できることを示す。

4. 前提を表す従属節における倒置の要因

4.1. 倒置の要因と従属節中の焦点

従属節中の倒置を引き起こす要因には従属節内の主語や動詞、補語などの意味的・統語的要因や、音韻に関わる要因があり (Wall 1980, Fuchs 1997)、複数の要因が複雑に影響し合った結果として倒置が起こる⁹⁾。倒置の多様な要因のうち意味的・統語的要因としては、主語が不定名詞句、制限的關係節を伴う、動詞が意味的に軽い、といった特徴が挙げられてきた。また Marandin (2011) では、統語的な観点から倒置の容認度は主語と動詞句の情報凝固性 (information solidarity) に影響を受け、情報凝固性が強い場合に倒置が容認されやすいと分析している。これらの先

表 2 制限・非制限的關係節と倒置の割合 (關係代名詞 *que* の場合)

	SV	VS	total
定名詞句 + 制限的關係節 (le/la/les NP <i>que</i>)	1097 (64%)	610 (36%)	1707
不定名詞句 + 制限的關係節 (un/une NP <i>que</i>)	411 (76%)	132 (24%)	543
非制限的關係節 (NP, <i>que</i>)	434 (87%)	67 (13%)	501

行研究で指摘されてきた従属節中の倒置の意味的要因の大半は「情報の重要度」という概念によって統一的に説明できると考えられる。「情報の重要度」については、高見（1995）が「文中のある要素」について、「話し手が聞き手に特に伝達したい部分、つまり断定（assert）している部分を焦点、または重要度が高い情報」と定義している。本稿ではこの定義を節レベルに応用し、「節内の要素のうち話し手が聞き手に特に伝達したい部分」を「重要度が高い情報」と呼ぶこととする。重要度の高さの判断基準は、情報の新旧、対比の有無、音声的な強勢の有無とし、新情報である、対比が含意されている、強勢が置かれる場合は重要度が高い要素と判断し、旧情報である、対比がない、強勢が置かれない場合は重要度が低い場合と判断する。

前提を表す従属節中の情報構造に関しては従来、Lambrecht（1994）などはトピックコメント構造を認めておらず、制限的關係節の先行詞がトピックを、關係節がそれに対するコメントに該当するという指摘にとどまっている。それに対して、Partee（1996）は英語の關係節や補文の中にも強勢が置かれる要素があり、従属節の内部にも焦点は存在しうる、と指摘している。本稿では Partee（1996）と同様な立場をとり、先行研究が提示してきた従属節中の倒置が表れやすい特徴には、情報の重要度という要因が影響していることを示すとともに、前提を表す従属節中でも情報の重要度が高い主語が倒置によって焦点化されうることを示す。

従属節中の倒置は目的語などの補語がある場合を除いて自由であり、統語的操作によるインフォーマント調査では個人的な文体的嗜好が含まれる可能性がある。実際の使用例の傾向を調査するため、統計的なデータをもとに分析を行うこととする。ここでは前章で収集したデータをもとに、先行研究で挙げられてきた倒置の要因を、主語の特徴と動詞句の特徴に分けて検討していく。まず主語名詞句に関する要因としては、不定名詞句である、列挙になっている、制限的關係節を含む、修飾部が長い、*ne...que* の制限の対象となっている、の5点を扱う。また、動詞句に関しては、意

味的に軽い、動詞が主語名詞句と共起しやすい、先行詞と共起しやすい、という3つの場合について検討し、これらの要因がすべて情報の重要度によって捉えることができ、倒置された主語が焦点を担いうることを示す。

4.2. 倒置されやすい主語名詞句と情報の重要度

文末焦点の原則の通り、主語の情報の重要度が高い場合、重要度が高い要素を節の後方に置くという要因が働き、倒置が起きやすい（久野 1978）。まず、主語が不定名詞句であるとき倒置が起きやすいが、これは不定名詞句が基本的に新情報を表すためである。主語が不定名詞句のとき、その主語は新情報として導入されることになり、その従属節における主語がもたらす情報の重要度は高くなる。特に（15）のように動詞句が短い場合、不定名詞句の主語がもたらす情報の重要度は動詞句よりも高くなりやすいため、倒置が起きやすい。

(14) Mais il avait suffi que je touche le sol de l'Union soviétique pour que se fit sentir comme au premier jour une peine sans nom. (PT1982 : 70)

But it was enough for me to touch the soil of the Soviet Union in order that made feel as in the first day a nameless pain.

(15) [...] l'émotion que ressent un lecteur de roman, un auditeur de concert, n'est pas une corde vibrante qui donne la même note [...]

(JG1980 : 167)

the emotion which feels a reader of a novel, a concert listener, is not a vibrating string that gives the same note

（15）では、不定名詞句の主語が新情報を表しているのに対して、動詞は一語で情報量が少ない。主語名詞句は動詞句よりも情報の重要度が高く、情報の重要度がより高い要素（主語）を後方に置くために倒置が用いられている。前章で収集した例を調べると、制限的關係節で主語が不定名詞句である割合は、SV : VS = 15% : 21%, *quand* では SV : VS = 9% : 15%, *lorsque* では SV : VS = 14% : 19% であるなど、前提を表す従属節でも主語が不定名詞句である割合は倒置の方が高い傾向

がある。

また、従属節内の倒置された主語名詞句にさらに制限的關係節が後続する場合、その主語名詞句は Erteschik-Shir (1997) の *restrictive focus* にあたる。従属節中の主語名詞句の指示対象が、制限的關係節の付加によって制限されることで下位範疇が設定され、その關係節の内容に該当するものと該当しないものという対比的な意味合いが生まれ、その節における焦点となる。収集した制限的關係節において、主語名詞句にさらに制限的關係節が続いていた例の割合は、SV:VS=2%:8%であり、制限的關係節を主語名詞句が伴うと倒置が用いられる傾向があることがわかる。

(16) Dès que passait dans la ville le seul cirque qui trouvait grâce à ses yeux, Arthur me mobilisait.

(EO1982:79)

As soon as passed through the city the only circus that pleased him, Arthur mobilized me.

(17) Elle ferma les yeux, les vagues faisaient osciller son corps tandis que montait en elle, irrépressible, violente, la houle qui allait la submerger.

(CHV1983:158)

She closed her eyes, the waves rocked her body as climbed into her, irresistible, violent, the swell that was going to overwhelm her.

(16) では、倒置主語の「彼のお眼鏡にかなうサーカス」が、「彼のお眼鏡にかなわないサーカス」と対比される。(17) では倒置主語「彼女を溺れさせようとしている心の動揺」と、それに該当しない動揺が対比となる。前提を表す従属節である時を表す副詞節において、*restrictive focus* を受けて情報の重要度が高くなった主語名詞句を節の後方に置くために、倒置されたと考えられる。また主語名詞句の修飾部が長く、語数が多く含まれているときも、名詞句に制限的關係節が付加されている場合と同様に考えられる。倒置主語に修飾部が多く含まれているほど、指示対象の同定に当たって主語名詞の指示対象が制限されることになり、その主語名詞句を焦点と考えることができる。

(18) Lorsque surgirent dans les phares de sa voiture les colonnades blanches de la résidence de l'ambassa-

teur de France, Babé sourit, [...] (CHV1983:34)

When appeared in the headlights of his car the white colonnades of the residence of the French ambassador, Babe smiled.

この例の倒置主語 *colonnades* 以下の同定の過程では、*colonnades* の指示対象のうち、「白い」という性質を持ち、「邸宅 *résidence*」におけるものであり、さらにその邸宅は「大使」のものであり、その大使は「フランス」からの大使である、というように、だんだんと指示対象の範囲が狭められていく。同時にその他の *colonnade* とは区別されるため、制限的な焦点と解釈でき、この従属節の中ではより重要な情報と考えられる。Wall (1980) では、語数と音節を基準とした主語名詞句の長さで SV と VS の関係について分析されており、主語名詞句が 1~3 語の場合は SV の例が多数だが、それ以上になると VS の例が増加してくることを指摘している。また前章で収集したデータにおける制限的關係節などの前提を表す従属節中の倒置の例のうち、倒置主語の名詞を修飾する語が 4 語以上ある場合と、關係節を伴う場合を合わせると、約 4 割を占める。これは、修飾語が多いほど指示対象が対比的になり、情報の重要度が高くなった主語を節の後方に置く傾向の現れだと考えられる。

また主語名詞句が列挙となっている場合は、それらの名詞句を提示することが目的となっており、主語がその節内でより重要な情報と考えられる。

(19) [...] dans la vie, les pensées et les propos de cette adolescente, qui ne pouvait dire deux phrases de suite sans qu'y apparussent son père, sa mère et son jeune frère.

(GM1981:336)

in the life, the thoughts and the words of this teenager, who could not say two sentences in a row without that appear there her father, her mother and her younger brother.¹⁰⁾

倒置主語が名詞句の列挙になっている例では、動詞に *être* が用いられている例も多く、より重要度の高い倒置主語を重要度の低い動詞の後方に置くという情報構造が働いていると考えられる。

さらに *ne...que* の制限の対象が主語であるとき、主語に焦点が当たり、主語がより重要な情報を担

うことになる。

(20) *Lalla avance au hasard, au centre du plateau où ne vivent que les scorpions et les scolopendres.*

(JMGLC1980 : 200)

Lalla advances at random, in the center of the plateau where live only the scorpions and centipedes.

(21) *Un parc prenait la place du vieux manoir dont ne subsistaient que quelques ruines.* (JK1990 : 68)

A park took the place of the old manor of which subsisted only a few ruins.

(21)では *quelques ruines* 以外は残されていないかったということが含意され、「いくつかの残骸」と「無傷のまま残っているもの」が対比の関係にある。主語に *ne...que* の制限の意味がかかるとき、必ず倒置が起こるが、これは排他的な焦点を担う主語名詞句を従属節内の後方に置くためとも考えられる。

以上、前提を表す従属節内中の倒置の例における従属節内の主語に関する倒置を引き起こす意味的な特徴について、先行研究では列挙に留まっていたが、ここでは「情報の重要度」という概念によって統一的に解釈できることを示した。主語が不定名詞句である、制限的關係節を伴うなど、倒置を促す特徴として挙げられてきた特徴は、主語がその従属節内において重要度の高い情報を担っていることを示し、より重要度の高い要素を節内の後方に置くために、倒置が用いられると考えられる。前提を表す従属節においてはトピックコメント構造はなくとも、聞き手に伝える情報の重要度が語順に影響を与えていることを明らかにした。

4.3. 情報の重要度が低い動詞

4.3.1. 意味的に軽い動詞

Wall (1980) では、意味的に軽い動詞、例えば *être, aller, venir, avoir, faire, dire* などが用いられるとき、倒置が好まれることを指摘されている。Wall (1980) は、関係節内においてこれらの動詞が現在形または半過去形で用いられている例について SV と VS の例数と割合をまとめており、いずれの動詞も SV が 1~2 割、VS が 8~9 割となっている。関係節以外の従属節については触れ

られていないが、前章で収集したデータのうち、関係節と同様な傾向が確認できた従属節がみられた。まず比較を表す副詞節である *comme* 節において *dire* が用いられるとき、SV より VS の頻度が高く、VS の *dire* の例が 175 例あったのに対し、SV で *dire* が用いられていた例は 2 例に限られていた。*comme* 節の倒置の割合が 57% と高いのは、*comme dit, comme le dit* という表現がほぼ慣用化していることが影響していると考えられる。*dire* の時制は現在形や半過去形に限らず、複合過去形や (23) のように条件法でも用いられる。

(22) *Comme dit Killy: « Les racistes pour la plupart, c'est des ignorants, ils savent pas ces choses-là. »* (VT1985 : 88)

As says Killy, "Racists for the most part, they are ignorant people, they don't know those things."

(23) *Comme le dirait mon professeur de math, s'il passait par là, « Il n'y a pas lieu d'être fière, n'est-ce pas, mademoiselle Lecler ? »* (CA1988 : 49)

As would say my math teacher, if he experienced that, "There is no reason to be proud, is it, Miss Lecler?"

(22) (23) ではインフォーマント調査によると、*comme* 節が通常の SV の語順であった場合、動詞よりも主語に若干の強勢が置かれて音読される。つまり従属節中の主語の情報の重要度が高いと考えられる。何らかの発言やその内容に関して誰かが「発言する」ことよりも、主語の表す「誰が」発言するのが重要な情報であるといえ、相対的に重要度が低い動詞を前方に、重要度が高い主語を後方に置くために倒置が用いられていると考えられる。

また、時の副詞節 *quand* 節中の動詞が *venir* である例に関して、*venir* が準助動詞として用いられている例を除いた SV と VS の例数はそれぞれ、SV が 17 例、VS は 32 例であり、倒置の割合が高いことが分かる。また、SV の例における *venir* は (24) のように主語の物理的な移動を表す傾向にあるのに対して、VS の例では (25) のように時間や時期の到来を表す傾向がみられた。

(24) *Autrefois, quand Nil venait au Centre avec son ami l'éditeur-suisse-roux-misogyne, le repas du soir était sempiternellement composé de légumes cuits,*

[...] (GM1981: 75-76)
Formerly, when Nil came to the Center with his friend the publisher—Swiss—red-haired— misogynist, the evening meal was always composed of cooked vegetables,

(25) Et quand vient l'heure d'enterrer l'un d'eux, nous éprouvons tous la même souffrance.

(JL1994: 213)

And when comes the time to bury one of them, we all experience the same pain.

(25) では SV の語順にしたとしても動詞 *vient* は主語名詞句よりも弱く発音されることから、動詞の重要度は低いといえる。*quand* 節は前提を表す従属節であるが、意味が希薄で重要度が低い要素を前方に置くという語順となっている。これ以外の前提を表す従属節においても意味が希薄な動詞が倒置の要因となっていることが確認できる。

(26) [...] lorsque apparurent sur l'écran, en lettres énormes, les trois impératifs de la propagande mussolinienne

(JDO1986: 281)

when appeared on the screen, in huge letters, the three imperatives of the Mussolini propaganda

(27) [...] un simple dos de plateau y domine les lointains autant que ferait une montagne.

(JG1992: 17)

a simple back of plateau dominates the distance as much as would do a mountain

このように、être, apparaître, faire など意味が希薄で情報の重要度が低い動詞をより前方に置くために倒置が用いられており、前提を表す従属節中でもより重要度が低い要素を前、重要度が高い要素を後に置くという語順の傾向が観察できる。

4.3.2. 主語名詞句や先行詞と共起しやすい動詞

次に従属節中の主語名詞句や、関係節の先行詞と共起しやすい動詞が用いられている場合について検討する。これに該当する場合、その動詞の情報的重要度は低くなりやすく、その動詞を従属節内の前方に置くために倒置が用いられる場合がある。ある名詞句と動詞が共起しやすい組み合わせであるとき、動詞は聞き手にとって前提の情報として理解されやすい。Erteschik-Shir&Lappin (1979) は、「島の制約」に関する dominance 理論

による分析の中で、主節が non-dominant と判断される場合にそれに従属する関係節からの抜き出しが可能になると分析している。関係節を導入する主節が、動詞句が意味的に空である場合や、先行詞と動詞の組み合わせが凡庸なもので主語によって動詞が想起されやすいものである場合、その動詞を含む主節は non-dominant と判断される。名詞句と動詞の組み合わせがありきたりで、名詞句から動詞が意味的に推測されやすい場合、動詞の重要度は低くなると言える。これを倒置に当てはめて考えると、主語と共起しやすい動詞が用いられている場合、その動詞は non-dominant と考えられ、その動詞の重要度は低く、それを節末に置くのを避けるために倒置する場合があると考えられる。

前章で収集した例のうち前提を表す従属節中の倒置の主語名詞句について¹¹⁾、Sketch engine の Word sketch の共起頻度高位語のリスト内の有無を判断基準とし¹²⁾、分析した結果、この要因が影響していると考えられる例は 13% であった。

(28) Les ombres commencent à raccourcir lorsque éclatent les premiers coups de feu. (CS1981: 47)

Shadows begin to shorten when burst the first shots.

(29) [...] un petit monsieur en veston, gravement pénétré, s'avance d'un pas rapide, tandis que battent les tambours. (AB1982: 34)

a little gentleman in his jacket, with plenty of confidence, advances with a rapid pace, while beat the drums.

「銃声」と「轟く」、「太鼓」と「鳴る」は、それぞれ共起しやすくありきたりな組み合わせである。これらの例では、主語名詞句から容易に連想できる動詞が用いられており、主語名詞句と比較すると動詞の重要度が低いと言える。前提を表す従属節においてもこのように情報の重要度が低い動詞を前に出すという情報構造に従って倒置が用いられていることが分かる。

主語名詞句と共起しやすい動詞と同様に、先行詞と共起しやすい動詞についても情報の重要度がより低いと考えられる。ただし、これは先行詞が関連しているので必然的に関係節に限られる。先行詞の名詞句と共起しやすい動詞が関係節内で用

いられているとき、その動詞は先行詞からの想起が容易であり、情報の重要度は低く、動詞に従属節の節末に置くことを避けるために倒置が用いられる場合がある。

(30) Enfin, il fut naturel et put parler de ce qu'il appréciait, en ajoutant les titres à la mode, les romans que lisait sa tante, Margaret Kennedy ou Rosamond Lehmann. (RS1980 : 203)

Finally, he was natural and could talk about what he liked, adding the titles un vogue the novels which read his aunt, Margaret Kennedy or Rosamond Lehmann

(31) Nil faillit répondre que l'école religieuse où étudiait sa jeune amante n'était pas mixte, [...]

(GM1981 : 123)

Nil almost replied that the religious school where was studying his young lover was not mixed

(32) [...], par le ronronnement des fours où cuisent les pierres. (JMGLC1980 : 165)

by the purring of the ovens where bake the stones.

先行詞から想起しやすい動詞が用いられていた倒置の例の割合は、非制限的關係節の *que* 節や *où* 節では 1 割前後であったが、制限的關係節の *que* 節では約 3 割を占めており重要な要因となっているといえる。先行詞と共起しやすい動詞は、*l'école religieuse de sa jeune amante* というように動詞を省略して前置詞句に置き換えが可能なことがある。この点からも分かるように、先行詞と共起しやすい動詞である場合、その動詞の持つ情報の重要度は低いといえ、制限的關係節内でも情報の重要度に沿った語順となっている¹³⁾。

先行詞ではないが、先行文脈において既に言及されている動作を表す動詞が従属節中で用いられている場合も、同様に情報の重要度は低いと考えられる。2 章で挙げた例を再掲する。

(10) Partir, comme partent les navires

(Romilly, cité dans Lahousse 2006)

文頭に *partir* が現れており、従属節でも同じ動詞が用いられている。この従属節中の動詞は繰り返しであり、動詞の持つ情報の重要度は低く、それを文末の焦点位置に置かないために倒置されていると考えられる。

一方で、動詞句に焦点がある場合は、倒置の頻

度は低下する。前章で収集した例の前提を表す従属節における否定文の割合は、制限的關係節で $SV : VS = 8.5\% : 2.6\%$ 、時を表す副詞節 *quand* と *lorsque* では $SV : VS = 1.5\% : 0\%$ 、目的を表す副詞節では $SV : VS = 9.1\% : 0\%$ となっていた。従属節中の動詞に否定がかかると倒置されにくいことが分かる。否定がかかることで情報の重要度が増した動詞句は、主語の後方に置かれる傾向があるといえる。逆に動詞が従属節の節末にあり、かつそれが文末にある場合、その動詞に焦点が当たることになるが、その動詞に否定がかかっておらず、意味的にも重要度が高くない場合、その動詞を焦点位置からはずすために倒置が用いられうる。2 章で挙げた (9) では主語が不定名詞句であるわけでもなく、文末の焦点位置から重要度の低い動詞を外すために倒置されていると考えられる。

5. ま と め

本稿ではまず、前提を表す従属節と断定を表す従属節中の倒置の生起頻度の差を明らかにした。Lahousse (2006b, 2011) では、従属節が断定を表す場合のほうが前提を表す従属節よりも倒置の割合が低いという指摘にとどまっていたが、本稿では理由節と譲歩節は他のどの従属節よりも倒置の頻度が低く、非制限的關係節は制限的關係節と比べると倒置の頻度が低いといえることを示した。また 4 章では、前提を表す従属節である制限的關係節や、時間や比較などを表す副詞節においても、動詞と主語の相対的な情報の重要度を基準として倒置が起きていることを示した。従来、断定の従属節中には情報構造が存在し、前提を表す従属節には情報構造がないと言われてきた。しかし本稿ではこれを否定し、情報構造を「情報の重要度」という概念で捉えたと、前提を表す従属節内にも焦点が存在することがあり、主語や動詞句の担う情報の重要度によって語順が決定されることを明らかにした。今回は主に統計的手法を用いて「情報の重要度」という面からの考察を行ったが、フランス語の文体的倒置は統語的要因や音韻に加え、文体的嗜好など複数の要因が複雑に絡み合って引き起こされる現象である。各要因がどのように働

いた場合に自然な倒置の表現となるのかを明らかにするためには、インフォーマント調査などより緻密な調査が必要であるため、今後の課題とした。

注

- 1) 下線は該当する従属節を表し、倒置された主語名詞句は斜字で表す。出典情報は引用文献を参照。
- 2) 英語訳は、英語としては正しくないが、フランス語の倒置を反映するために倒置の構造を保持したまま逐語訳し、該当する従属節には下線、倒置主語は斜字で表した。
- 3) Lahousse は断定 assertive に対して非断定 non-assertive という用語を用いているが、これは前提と同じ意味であると考えられる。本稿では基本的に前提という用語を用いる。
- 4) 高見 (1995), 高見 & 久野 (2006). 4 章参照。
- 5) Lahousse (2011) は断定・非断定の分類基準として, Erteschik-Shir (1979) の lie test や副詞 probablement, peut-être を挿入するテストを適用している。
- 6) それぞれの接続詞の直後に, SV の場合は限定辞または固有名詞が来る例, VS の場合は動詞または否定辞や再帰代名詞, 目的語代名詞が来る例を検索した。関係節と補文を区別するため, que の直前に名詞が来る例と直前に動詞が来る例を, où については関係代名詞の前 2 語以内に名詞が含まれる例と直前に動詞が来る例を検索し, dont は検索の後, 倒置の例ではないものをデータから除外する作業を行った。
- 7) duquel, auquel は lequel に含める。
- 8) 古川 (1983) が指摘しているように, 関係代名詞の前に《, 》がなくても, 意味的に非制限的な意味である関係節が存在するが, ここでは便宜上, 制限的關係節と非制限的關係節の区別を, 関係代名詞の前の《, 》の有無によって判断した。
- 9) 主語が不定名詞句である場合に必ず倒置するというわけではなく, 主語が不定名詞句であっても動詞句が補語などを含み, より情報の重要度が高い場合には SV の語順が選択される。
- 10) 「S が V することなく」という意味の sans que という従属節の例である。英語では without that 節は続かないが, フランス語を逐語訳するために without that とした。
- 11) 関係節と comme 節は倒置の例が多量であったため, 各接続詞から 100 例ずつランダムに抽出し, 分析した。
- 12) Sketch engine とは Adam Kilgarriff と Pavel Rychlý によって作成された大規模コーパス検索ツールであり, 52 か国語のデータを含む。その中の機能の一つに Word sketch があり, 語に付随する文法項目やコロケーション情報をまとめることができる。https://www.sketchengine.co.uk/
- 13) 情報の重要度が低い動詞は前方に置かれる傾向

にあるが, 同じ動詞でも動詞句が対比になっている場合は, 焦点が動詞句に当たっているため節末のほうが好まれる。les romains que sa tante écrivait, non pas lisait.

引用文献

- [AB1982] Antoine BLONDIN, *Ma vie entre les lignes*, Gallimard, 1984.
- [CA1988] Christine AVENTIN, *Le Cœur en poche*, Mercure de France, 1988.
- [CHV1983] Catherine HERMARY-VIEILLE, *L'Épiphanie des dieux*, Gallimard, 1984.
- [CS1981] Claude SIMON, *Les Géorgiques*, Les Éd. de Minuit, 1992.
- [EO1982] Éric OLLIVIER, *L'Orphelin de mer*, Gallimard, 1984.
- [FD1985] Françoise DOLTO, *La Cause des enfants*, Laffont, 1995.
- [GM1981] Gabriel MATZNEFF, *Ivre du vin perdu*, Gallimard, 1985.
- [JDO1986] Jean D'ORMESSON, *Tous les hommes sont fous*, Le Livre de poche, 1989.
- [JDO1993] Jean D'ORMESSON, *La Douane de mer*, Gallimard, 1995.
- [JG1980] Julien GRACQ, *En lisant, en écrivant*, Corti, 1991.
- [JG1992] Julien GRACQ, *Carnets du grand chemin*, Corti, 1992.
- [JK1990] Julia KRISTEVA, *Les Samouraïs*, Gallimard, 1992.
- [JL1994] Jacques LANZMANN, *La Horde d'or*, Pocket, 1995.
- [JLB1980] Jean-Luc BENOZIGLIO, *Cabinet portrait*, Éditions de Seuil, 1980.
- [JMGLC1980] Jean-Marie Gustave LE CLÉZIO, *Désert*, Gallimard, 1995.
- [MT1989] Michel TOURNIER, *Le Médianoche amoureux*, Gallimard, 1996.
- [PT1982] Paul THOREZ, *Les Enfants modèles*, Gallimard, 1986.
- [RS1980] Robert SABATIER, *Les Fillettes chantantes*, Albin Michel, 1980.
- [VT1985] Victoria THÉRAMÉ, *Bastienne*, Flammarion, 1985.

参考文献

- Bonami, O., & Godard, D. (2001), "Inversion du sujet, constituency et ordre des mots". J. -M. Marandin (ed) *Cahier Jean-Claude Milner*, Editions Verdier, 117-174.
- Erteschik-Shir, N. (1997), *The dynamics of focus structure*. Cambridge University Press.
- Erteschik-Shir, N. (2007), *Information structure: The syntax-discourse interface*, Oxford, Oxford University Press.

- Erteschik-Shir, N., & S. Lappin (1979), "Dominance and the functional explanation of island phenomena". *Theoretical linguistics* 6(1-3), 41-86.
- Fuchs, C. (1997), "La place du sujet nominal dans les relatives", C. Fuchs (ed) *La place du sujet en français contemporain*, Louvain-la-Neuve, Duculot, 135-178.
- 古川直世 (1983) 「関係節の指示機能と記述機能について」『フランス語学研究』17, 61-77.
- 平塚徹 (2002) 「フランス語の関係節における文体的倒置について」『京都産業大学論集』29, 119-163.
- Kleiber, G. (1987), "Relatives restrictives/ relatives appositives : dépassement (s) auto- risé (s)", *Langages* 88, 41-63.
- 河野継代 (2012) 『英語の関係節』, 開拓社.
- Komagata, N. (2003), "Information structure in subordinate and subordinate-like clauses", *Journal of Logic, Language and Information* 12, 301-318.
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』, 大修館書店.
- Lahousse, K. (2006a), "NP subject inversion in French : two types, two configurations", *Lingua* 116-4, 424-461.
- Lahousse, K. (2006b), "L'assertion et l'inversion du sujet nominal dans les subordonnées adverbiales", *Lingvisticæ Investigationes* 29-1, 113-124.
- Lahousse, K. (2011), *Quand passent les cigognes. Le sujet nominal postverbal en français moderne*, Presses Universitaires Vincennes.
- Lambrecht, K. (1994), *Information structure and sentence form*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Marandin, J-M. (2011), "Subject inversion in French. The limits of information structure", *Proceedings of the HPSG 2011 Conference*, 327-347.
- Mathesius, V. (1975), *A functional analysis of present day English on a general linguistic basis*, J. Vachek (ed), The Hague, Mouton.
- Partee, B. H. (1996). Allegation and local accommodation. B. Partee & Sgall P. (ed.) *Discourse and meaning : papers in honor of Eva Hajicová*, 65-86.
- 高見健一 (1995) 『機能的構文論による日英語比較』, Vol. 4, くろしお出版.
- 高見健一, 久野暉 (2006) 『日本語機能的構文研究』, 大修館書店.
- 東郷雄二, 大木充 (1986) 「フランス語の主語倒置と焦点化の制約・焦点化のハイエラキー」『フランス語学研究』20, 1-15.
- Wall, K. (1980), *L'inversion dans la subordonnée en français contemporain*, Stockholm, Almqvist & Wiksell International Stockholm.

Stylistic Inversion and Information Structure in Subordinate Clauses of French

Eriko TANIGUCHI

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary This study aimed to investigate the frequency of stylistic inversion in various subordinate clauses in French and to analyze the cause of inversion in presupposed subordinate clauses. Lahousse (2011) identified causal or concessional clauses and non-restrictive relative clauses as assertive and found that inversion in assertive clauses is caused by non-topicalization of the subject. She pointed out that the frequency of inversion in assertive clauses is lower than that in presupposed clauses because of this constraint. However, detailed data was not included and the cause of inversion in presupposed clauses was not fully explained. Therefore, this research extracted data from the corpus Frantext and analyzed the frequency of inversion quantitatively for each conjunction of various subordinate clauses. As a result, for assertive clauses, the frequency of inversion was the lowest in causal and concessive clauses. In addition, the frequency of inversion in non-restrictive relatives was lower than that in restrictive relatives. Furthermore, this study revealed that inversion in presupposed subordinate clauses occurred more frequently when the importance of information conveyed by the subject was relatively higher than that carried by the verb. Accordingly, inversion in presupposed subordinate clauses occurs depending on "the degree of importance of information."